

# 東洋大学第40代学長に松尾友矩教授が再選

7月に行われた学長任期満了に伴う学長選挙において、無投票で現職の松尾友矩(まつおともむり)国際地域学部教授(67歳)が第40代学長に再選されました。任期は9月11日から2009年9月10日までの3年間です。再選を果たした松尾学長は、1期(1年)間の総括と今期にかけの意気込みなどを伺いました。

学長職に就いて3年。

1期目ではどのような面で

成果を出せたとお考えでしょうか？

「全学的目線」を持った取り組みに力を注いできました。学長となつてます感じしたのは、各学部には優れた研究や独自の成果がありながら、学部内だけに留まっていたり、またそれぞれが同じような悩みを抱えつつも、共有できていないという現状でした。これは大規模総合大学ゆえの悩みといえるのですが、学部や職域を超えて相互理解し、情報を共有化する必要性を早急に感じ、初の試みとして実践したのが、全学プレゼンテーション大会です。

各学部や研究科、その他の部署が発表の機会を持ち意見を交換する中で、東洋大学が今後目指すべき方向性を明確にして意思の統一を図り、教職員が一致団結する。それは学生へのサポート体制や教育内容の充実にも必ずや繋がるものと確信しています。



それでは2期目の取り組みの大きなキーワードになるのは、「教養教育」であると。

91年の大学設置基準の大綱化以降、大学における教養教育の比重が軽くなる傾向があります。1、2年が教養、3、4年が専門という従来のシステムは、学びたい目的の専門科目になかなかたどり着かないことへの不満などがあつて、どの大学も専門色を強めた改編を行ってきました。しかしその結果、専門教育に必要な教養教育といった比重の置き方になり、専門分野を超えた教養を学ぶ機会が減ってきているように思います。専門分野を超えた事象の理解がどれだけあるかが、その人物の社会的な評価や役割を決定づけるものになるのです。「教養」とは構えて学ぶものではなく、若く柔軟な時期に否応なしに、あるいはたまたま聞いたものが結果として身に付いていくものです。総合大学の強みを活かして、「教養」に対する魅力あるカリキュラムを作るのが当面の課題です。学年が上がつても学びたいときに学べるよう、教養教育に幅を持たせるシステム作りを考慮したいと思っています。

最後に、学生の皆さん、そして保護者の皆さんへのメッセージをお願いします。

学生には自分の専攻分野を超えて、内なる能力を鍛えてもらいたい。変化を恐れず、自らを枠にはめず様々なことにチャレンジして、勉学の量を含め経験値を高めていく。そしてそれぞれの立場で経験したことを自らの言葉で発言し、自分をアップデートする方法を見つけてください。目標に果敢に挑み、柔軟に対応できる力を養える場として、大学もサポート体制を整えていきたいと思っています。

保護者の方には学生の将来への挑戦を積極的に支援していただくことをお願いします。従来の物差しでは測れない人生を開拓してほしい。その思いは、『生き方に哲学を持つ挑戦者たれ』という言葉として発信しています。



学長主催「中期目標・中期計画プレゼンテーション」。各学部、センターによる9時間わたる発表後、総括する松尾学長(2005年12月)

現在の東洋大学にとって最も大きな課題とは。

「大学のブランド力の向上」。首都圏の有力大学という自負はあつても、本学の本来の姿が社会に対して適切に伝わりきれていないと感じています。理解がある人からは評価されているところ、満足するのではなく、進化し発展してゆく東洋大学を目に見えない形で積極的に情報発信していくことが求められています。東洋大生の社会的評価として、まじめな熱心さを「遠慮がちでおとなしい」と目されているようです。また、高い研究成果が外部からの評価につながる一面もあり、その中にはどこか共通項があるように感じています。これからは外部の人とわかりやすく見せる努力が必要です。「東洋大学」の名を背負う教員や学生が、学外に出て活躍し、東洋大学の力を広くアピールできるような機会を捉えていくことを重点的に、そのための支援を惜しみなくしていきたいと思っています。

「東洋大学のよさ」をどこに感じていらっしゃいますか。また今後、「個性ある大学」としてどのような面を伸ばしていきたいとお考えですか？

「諸学の基礎は哲学にあり」と説いた建学の精神そのものです。政治法律から理科の理工芸に至るまで、すべての学問の基礎に哲学を求めるこの精神は、数ある私立大学の中でも大変ユニークなものです。このような特徴を大切にしながら、全学総合科目を開講し、哲学の重要性を感じてもらおうカリキュラムを組みましたが、もう少し受講者が増えて欲しいですね。哲学はまた、学問としての領域を超えた生き方や信条を支える手だてとしても重要ですから、いずれ実学を超えた有利性を持つものであることが社会に出るとわかってくるはず。この建学の精神が、東洋大学最大の武器であることをそれぞれが自覚し、個性として確立させることが東洋大学らしさを表現する有効な方法であると思います。そのためには、「役に立つ哲学」をどのようなメッセージとして伝えていくかが大きな課題です。前号(「東洋大学報」2003号)の特集で紹介した「共生」というキーワードも社会が必要としている「哲学」のあり方を考えた上でたどり着いたひとつのかたちです。そこから今後、力を注ぎたいと考えているのは、哲学を含めた若い学生諸君の将来の栄養となる「教養教育の充実」といえます。

## 「東洋大学『エコ・フィロソフィ』学際研究イニシアティブ」が始動

(Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy, Toyo University, 略称TIEPh)

創立の理念である「哲学」のあり方を現代社会に追究し、たどり着いた「共生」というキーワード。  
「東洋の知」の観点から、現代社会に横たわるさまざまな諸問題を解決し、地球規模の課題に応え、現世代と未来の世代との調和ある共生「サステイナブルな社会の形成」を目指すための取り組みが、松尾学長主導のもとで本格的に始まりました。

Q 最近、「サステイナビリティ」という言葉をよく聞きますが、どのような意味でしょうか？

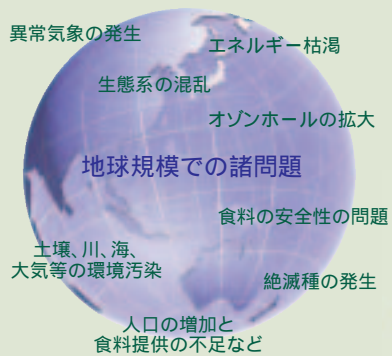
「sustainable=持続可能な」という語源から来ています。サステイナビリティ学は国際社会が抱える地球環境問題などの喫緊の課題を解決し、地球社会を「持続可能なもの」へと導くビジョンを構築するための、その基礎となる新しい学術のことを意味します。たとえば昨今では環境破壊・汚染といった問題は、同地的なものにとどまらず、地球規模のものとして指摘されています。そのような危機感に対して、多様な領域から総合的に取り組む世界最高水準のネットワーク型研究拠点(東京大学を中心とした「サステイナビリティ学連携研究機構(Integrated Research System for Sustainability Science・略称IR3S)」)があり、東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブは2006年度からその協力機関として参加しています。

Q 「エコ・フィロソフィ」とは？  
どのようなことに取り組むのですか？

直訳すると「環境×哲学」。まさに、哲学をへん入した共生社会への願いを託した名称です。東洋大学は唯一、人文・社会分野からこのサステイナビリティ学のプロジェクトに参加しています。これまで学内で展開してきた「共生学」の構築を目指した研究プロジェクトが基礎となっており、以下3つの研究ユニットから構成されています。

- 第1ユニット：自然と人間に関する東洋の知とエコロジーの研究
- 第2ユニット：アジア諸地域におけるサステイナビリティに関する価値意識の究明
- 第3ユニット：環境倫理を含む哲学的環境学サイエンスの追究

10月21日(土)に開かれる第一回目のシンポジウムの様子は、次号で紹介いたします。詳細は、10月に開設した東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブホームページ <http://tieph.toyo.ac.jp> をご覧ください。



IR3Sへの参加に関する記者会見の様子(2006年3月)



第1回ワークショップを開催(2006年8月)